

2025 年度私立大学図書館協会東地区部会
館長会 会議録

日 時：2025 年 6 月 6 日（金）10：00～11：10

方 法：Web 会議（中央大学）

参加者：65 名

テーマ：2040 年の大学図書館

司 会：東地区部会長校 中央大学図書館長 三浦 俊彦

配付資料

- 1 講演資料「2040 年の大学図書館」

議 事

- 1 開会挨拶

東地区部会長校中央大学図書館長 三浦俊彦より、開会の挨拶および趣旨説明があった。

- 2 講 演

テーマ：「2040 年の大学図書館」

講師：中央大学文学部教授 小山 憲司 氏

講演資料については、「私立大学図書館協会会報 第 166 号」（2026 年 9 月刊行予定）に掲載予定。

- 3 質疑応答・意見交換

Q 1．大学図書館が、内向きで閉じた文化を持っている状況の中で、DX やオープンアクセスを実現していくための今後に向けて、図書館員の専門性を含めて小山先生提言の閉じない共同体について示唆いただきたい。

A1（講師）．図書館システムを大学間で共同調達・運用する事例があるように、図書館の持続可能な発展のためには人材育成はもちろん、複数の機関が協働することで、国内の大学図書館サービスを維持、発展させることができる。そうしたコミュニティづくり、制度やシステムを支える仕組みの形成が重要になってくる。

Q 2．8 学部 20 学科もある総合大学では、それぞれのリクエストが多様になり、理系ではデジタルデータ、最新の研究成果が優先され、文系では従来の紙ベースの書籍雑誌バックナンバーが欲しいなどの多様なニーズに対して、図書館ではどのように将来対応していけばよいのか。

A 2（講師）．例えば、歴史学でもデジタル人文学の動きが活発であり、AI を使って新たな発見、研究成果を導き出すといった活動が進められている。和装本のような紙資料だけでなく、それらをデジタル化したものもコレクションに加わることで、人文学だけでなく、社会科学や自然科学の研究者もそれらを活用できる。学内に多様なバックグラウンドの研

究者がいることにより、新たな研究の発展性を見出すことができると考える。さらに、ユーザーの行動やニーズに寄り添うためには、米国で実践されている「Embedded Librarian（学部や研究所に常駐する図書館員）」のような、アウトリーチ型のサービスも手がかりになると考える。

Q 3. マーケティングにおいては、1990 年代のインターネット、デジタルの時代から、消費者参加型製品開発というものが少しずつ始まり、ユーザーがアイディアを持ち込んで一緒に製品開発するという流れも一部生まれてきた。図書館においても、学生が運営に関わることで図書館が活性化するのではないか。

A 3（講師）. 2010 年前後から学習の場所としてのラーニング・コモンズに注目が集まり、そこで学生同士が互いに協力しながら学び合うピアラーニング、学生によるサポートといった活動が盛んに行われる中で、学生協働も広がっていった。学生が自分たちの居場所として図書館を捉えることで、図書館がより活性化していくことが考えられる。今回紹介した海外の大学（例 Brigham Young University）では、図書館が多くの学生スタッフを雇用し、学生に働く機会を与えることでそこから学べる環境を用意するといった事例が多く見られた。国内の図書館でもこうした取り組みが増えていると思われることから、図書館を運営する職員も組織の発展に向けた活動の 1 つとして、学生協働を上手に活用することを期待している。

4 講演後のアンケートからの質疑応答

Q 1. 図書との出会いの場として考えたとき、図書館をメタバース化して公開することは、アクセシビリティと安全性の両立という点で意味があると思うのですが、これまでの同種の取り組みの有無、文科省等からの補助金も含めて、その展開可能性について教えてください。

A1（講師）. おっしゃることに私も賛同します。私の話でも触れましたが、コロナ禍で図書館を閉館、あるいは入館を制限しているときに、さまざまな対策がとられました。例えば、東京学芸大学では図書館の書架の写真をとり、「学芸大デジタル書架ギャラリー」としてウェブで公開していました (<https://lib.u-gakugei.ac.jp/mol/shoka>)。このほか、東京学芸大学を含む事例が『大学の図書館』2022 年 2 月号で紹介されています。

https://www.daitoken.com/publication/kaiho_0A/20220200.pdf

また、『情報の科学と技術』74 巻 11 号（2024 年）で「メタバース（仮想世界）の活用」という特集も組まれています。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jkg/74/11/_contents/-char/ja

海外の事例として、米国の大学図書館における実態を調査した報告書が国立国会図書館のウェブサイトで紹介されています。

<https://current.ndl.go.jp/car/229264>

私は、当日も触れたとおり、DX による図書館サービスの変革が必須であると考えています。それは、利用者はもちろん、図書館職員にとっても重要な方策であると考えためです。他方、図書館という物理的な空間、本というモノなどのリアル世界にも相応の利益が

あると思います。

例えば、たまたま本日（6月19日）の朝日新聞朝刊3面の「ひと」欄で、宇野常寛さんが書店を開くというお話が紹介されていました。「予想もしなかった本と出会え、世界観が広がる。」という、使い古された言葉ですが、セレンディピティに触れています。こうした経験をメタバースに取り入れることもできるでしょうし、それとは異なるアプローチを開発することも、今後、図書館の重要な役割になっていくかもしれません。一方で、体感を伴う経験を物理的な図書館で展開することも重要のように思います。私自身、多面的に検討できたらと思いました。ありがとうございました。

なお、文科省等からの補助金活用に関しては、恥ずかしながら、アイデアがございません。お役に立てず、申し訳ございません。

Q2. 理想を実現するための財政面の課題はどのように解決するのか。

A1（講師）. ご質問いただいた課題は、おそらくいずれの大学にもあてはまるかと思います。そのときに、ご自身の大学で独自に解決する方法もあれば、複数の大学で協力、協働して解決する方法もあるかと思います。

前者に関して、私自身、有効な方策を持ち合わせていませんが、大学の課題は大学図書館の課題でもあること、その解決に図書館が関与できること、大学図書館の課題を大学全体で共有することなど、学内での情報共有や相互理解の醸成が最初の一步ではないかと考えました。もちろん、言うほどに簡単な話ではないとは思いますが。この点はご容赦ください。

後者は、直接的ではありませんが、大学図書館コンソーシアム連合（JUSTICE）は経済的な電子ジャーナル契約を目指していますし、NIIが運営するJAIRO Cloudを利用した機関リポジトリの構築も協力形態の1つかと思います。これからの学術情報システム構築検討委員会でも、各大学の図書館業務の効率化、高度化を支援できる共同利用システムの構築に務めています。当日も話題にしましたが、共同で図書館システムを調達することでコストを抑えたり、図書館職員間で研修・教育の機会を提供することで業務負担を軽減したりといった近未来図も描きながら、検討を進めています。

今後とも国内の大学図書館コミュニティという観点からもご検討いただけたら幸いです。

以上